文部科学省
IB教育推進コンソーシアム

STUDENT TESTIMONIAL

髙柳彩佑さん（茗溪学園中学校高等学校 2020年卒）

2020年度に茗溪学園を卒業し、アメリカDePauw大学に進学。
グローバルヘルスとコンピューターサイエンスをダブルメジャーで学ぶ。現在はイギリスの大学に留学中。

「TOKで得た思考法で、自分を客観的に見つめ、自分の考えを言語化できるようになりました。」

英語で学ぶ環境を知らなかった自分に、違う価値観を見せてくれた IB 教育で海外大学への進学も視野に。

私は茨城の田舎出身で、放課後は外を走り回っているような小学生時代を送っていました。中学校に入る前に公文に通い、英語に触れていましたが、リアルな英語に触れる環境はほとんどありませんでした。その後は、中高一貫の茗溪学園に入学し、中学 3 年生の時に、IBDP が学校に導入されることが知らされました。日本の受動的な教育制度と異なるだけでなく、英語で授業があり、課題も大変だと言われ、最初は自分が太刀打ちできる環境ではないと圧倒されました。しかし、新しい環境での学びだからこそ、自分の人生が変わるかもしれない、そして IB1 期生として未知なる世界に飛び込んでみたいと思い、IB にチャレンジしたいという気持ちが沸きました。DP 科目選択は、文系理系に偏りたくなかったため、日本語 A、EnglishB、歴史、生物、数学、フィルムを選びました。

IB コースに入ると、クラスの半分は帰国子女でした。彼らが海外大学を目指すという話を聞いて、海外大学を志望するという道が私の中でも現実味を帯び、IB コースに入ったことで、自分にもそのような選択肢があることを肌で体感しました。そして、実際に私も海外大学への進学を目指すことにしました。IB ではただ知識を身につけるだけではなく、TOK や EE、CAS など自分の知識を深める力を養うことができ、自分の視野が広がっていくことを実感しました。私自身が大きく成長したと感じた科目は、歴史と日本語 A の授業です。歴史の授業では、中学までの暗記型の勉強法とは異なり、歴史的事象の原因や結果を経済、政治、イデオロギーなど様々な観点から常に考察しました。それによって、異なる観点から一つのものを見る楽しさと重要性を学ぶことができました。これは歴史だけでなく、他の科目にも応用できる力だと感じました。さらにその力を伸ばしたいと思い、IA や EE も歴史で行いました。自分の興味のあるテーマをそのような多角的な視点から調査し、自分なりの結論を導く経験は、大学生活においても役立っています。日本語 A に関しては、純粋に文学の面白さを学びました。私は、文学に苦手意識を持っていましたが、使用されている言葉や時代背景を細かく見ることで、その文学のテーマを深ぼりできることを学び、文学の面白みを感じました。

自分は何者なのかを考える中で培った、生きる上での重要なスキルは今でも役にたっている。

TOK は、実社会にある情報が、どのように人々の知識の形成に影響を与えているのかをわかりやすく言語化したプログラムだと思います。一見難しそうに聞こえる科目ですが、この考え方は自分個人に適応することもできると思っています。今、私は定期的に自分の知識や考え方を客観的に考えることがありますが、振り返ると、この力は、TOK で知らず知らずのうちに身につけられたのではないかと思います。世の中にある情報が、どのように自分のもの（知識）になっているかを自然に考えられるようになりました。特に海外大学受験の時には自己分析の重要性を感じました。出願の時には自分とは一体何者か、自分を形作っているものは何かを考えます。自分はどういう価値観があって、どう感じるのか、どのように周りの影響を受けているのかというのを考え、言語化

していました。また、自分自身の価値観を形成する際に、EE などを通して身につけた批判的思考力が役立っていると感じています。更に、周りの価値観を寛容に受け入れる力も、私の視野を広げることに大きく貢献していると思います。

進路の変更に不安も感じていたが、予防医療―グローバルヘルスの道を選択。

今となっては淡々と話せますが、やりたいことが見つからず悩みに悩んだ時期もありました。当初、世界と日本の懸け橋になりたいと国際・メディア関係を考えていました。しかし、実際にその業種に携わることで自分がやりたいことと違うと感じ、自分の興味を見失ってしまったのです。また、コンピューターサイエンスで身につけられるプログラミングは、スキルとして将来、確実に使えると考え、こちらも専攻科目に加えていました。この様なことを考えていた 1 年前の私は、メディア業界での実務経験も積み始めていました。ところがその頃、アメリカの生活の中で食生活の在り方に違和感を覚え、自分が予防医療の中でも食事にフォーカスした健康維持について強い興味を持っていることに気づきました。それまでに努力を積み上げてきた路線を転換し、社会に出るために整えていた土台を壊し、また一から作らなくてはいけない。それには時間もかかりますし、これまでの様に淡々と経験を積んで行けるかどうかわからないという不安もありました。しかし、今は自分なりにやりたい事に重きを置いて、少しずつ前に進んでいると感じています。バランスの良い食事の啓蒙という地道な活動と共に、現代におけるヘルスケアシステムを批判的に見つめ直すことで、この社会の問題点を俯瞰的に学ぼうとしています。

今後は、医療従事者にはない視点を持ちながら、予防医療の分野、特に食を通して人々の健康を支える仕事がしたいと思っています。現在イギリスの大学に留学している事は、自分にとって大きな意味を持ちます。私の所属するリベラルアーツと比較すると、留学先は、規模が大きいけれど、自分の興味をしっかりと探求できる環境であるため、とても刺激的なのです。IB で培った批判的思考力、リサーチ力を最大限に活用し、学びを深めています。学術的な学びだけでなく、異なるバックグラウンドの人と話すことで、自分が成長していることも感じます。IB に入る前は英語で話すことに抵抗感がありましたが、今では英語で様々な国の人と話し、笑ったりできる時間が楽しく、自分がよりオープンになり、積極的になったと感じます。日常から得られる新たな価値観も私の将来の選択肢を広げているかもしれません。

IB 生へのメッセージ

私は中学生の時、IB の説明を聞いても、よく理解できませんでした。でも、少しでも成長の可能性を IB 教育の中に感じたり、既存の日本の教育システムに何かしらの引っ掛かりがあったりするのであれば、IB を視野に入れてもらいたいと思います。IB には CAS や、TOK、EE など、自分自身を探究できるいい機会があります。

中学時代の私は周りに合わせ、協調性を大事に生きてきました。それゆえに、自分自身の強みや興味が分からなくなったことがありました。ところが、私がネガティブに捉えていた協調性が同時に強みでもあったのだと、IB でのグループワークを通して感じることもできました。私はメンバーの意見や個性を尊重し融合できる協調性がありました。IB を通して自分の意見を持つ癖がついたことで、協調性を保ちつつ、相手、そして自分の個性を尊重するというバランスの取り方を学ぶことができ、それが今の私の強みになっています。自分の強みを改めて考えたりと、ひたすら勉強するだけでは得られないスキルや経験を求めるのであれば、IB は魅力的なプログラムなのではないでしょうか。

IB 教員を目指す方には、生徒が楽しく学べる環境作りや、ポジティブなサポートを通して、生徒の可能性を育ててほしいなと思います。先生と生徒という隔たりを作るのではなく、先生も生徒も一緒に学んでいく、先生は生徒の学びをアシストするというスタンスが良いと思っています。

私には、中学生以前は海外志向・海外大学・英語で学ぶといった考え方があまり家庭環境にありませんでした。しかし IBDP を取得したい、海外大学に進学したいという決意を諦めず、実現することができ、自分自身が大きく変わりました。もちろん家族や先生が私の選択を信じ、支えてくれたことも大きいと思います。わたしは、このような選択肢がある事を多くの人に知ってもらいたいと思っています。

※取材＝文部科学省 IB 教育推進コンソーシアム事務局 (武藤・金子・深井・瀧本) 文＝クラー真美